短 報

耳下腺腺房細胞腫の細胞所見

国立豊橋病院研究検査科¹⁾, 名古屋大学医学部第1病理²⁾, 国立名古屋病院病理³⁾

北川 博¹⁾ 谷田部 恭²⁾ 松下 孝二¹⁾ 内田 一豊¹⁾

田村 潤³⁾

I. はじめに

唾液腺に発生する腺房細胞腫 (ACT) は低悪性度腫瘍に分類されるまれな腫瘍であることから¹⁾, 穿刺細胞診での報告例は乏しい^{2,3)}。今回われわれは, 術前の穿刺細胞診で組織型推定が困難であった耳下腺 ACT の1例を経験したので, その細胞所見について報告する。

II. 症 例

症例は38歳男性。約1年前より右耳下腺の腫瘍に気づくが無痛性のため放置。平成4年5月11日当院外科受診し穿刺細胞診施行。平成4年8月10日腫瘍摘出術施行。組織診断により耳下腺 ACT とされた。術後, 現在まで臨床的に局所再発, 転移は認められていない。

穿刺細胞所見: シート状または腺房状配列を示す細胞集団が多数出現する (写真1)。背景に裸核細胞や2~3個から成る小集団がみられるものの単調な像を呈している。細胞は小型で円柱状, 細胞質は泡沫状で

ライト緑に淡染する。細胞質顆粒は Papanicolaou (Pap.) 染色では認められないが, May-Giemsa (M. G.) 染色では好塩基性の小型顆粒が明瞭に認められる細胞が存在する (写真2a)。N/C比は小さく核は偏在する。核の大小不同はほとんどみられない。クロマチンは顆粒状で均等に分布し, 小型の核小体が1~2個認められる。以上の所見より腫瘍性病変 (多形腺腫

写真1 穿刺細胞像。単一の細胞成分より成り単調な像を示す(a)。一部は腺房状構造を呈する(b) (Pap. 染色 a: ×40, b: ×100)

Cytological findings of acinar cell tumor of the parotid gland—A case report

Hiroshi KITAGAWA¹⁾, C.T., C.M.I.A.C., Yasushi YATABE²⁾, M.D., Koji MATSUSHITA¹⁾, M.T., Kazuho UCHIDA¹⁾, C.T., J.S.C., Jun TAMURA³⁾, M.D.

¹⁾Clinical Laboratory, Toyohashi National Hospital

²⁾The 1st Department of Pathology, Nagoya University School of Medicine

³⁾Department of Pathology, Nagoya National Hospital

論文印刷請求先: 〒441 愛知県豊橋市中野町中原100 国立豊橋病院研究検査科 北川 博

平成4年12月26日受付

平成5年4月16日受理

写真 2 a: 穿刺細胞像, 胞体内に小型顆粒が認められる (←) (M.G. 染色, $\times 100$)
b: 組織像, 腺房細胞に類似した腫瘍細胞の増殖が主体を成す (H-E 染色, $\times 10$)

または単形腺腫疑) を推定した。

組織所見: 腫瘍の大きさは 2×3 cm, 充実性で被膜に覆われていた。腫瘍細胞は単一な好塩基性の胞体を持つ細胞から成っており, これらの細胞は腺房に類似した構造を示していた (写真 2 b)。腫瘍細胞の細胞質はジアスターゼ消化 PAS 反応陽性, アルシアン青染色陰性であった。

病理診断: acinic cell tumor (well differentiated type)

III. 考 察

ACT の細胞診断では, 好酸性腺腫や腺リンパ腫と

の鑑別が必要とされる^{2,3)}。しかしながら Koss⁴⁾ が指摘するごとく, 本腫瘍は腫瘍細胞が正常腺房細胞に類似することから, 穿刺細胞診ではまず非腫瘍性病変との鑑別が問題となる。本症例の穿刺細胞所見から, 腫瘍性病変の推定は容易であったものの, 組織型推定は難しかった。これは細胞異型が乏しいことから良性腫瘍を考え, 特徴的と思われる腺房状の細胞配列所見を考慮できなかったことによる。Palma ら³⁾は, 分化型腺房細胞癌の細胞診断基準として, 不規則腺房構造の出現と細胞質顆粒の存在をあげている。しかしながら, 腺房様構造が認められなかったとする ACT の報告例²⁾もあり, 出現する細胞集塊の形態は症例により異なる可能性もあげられる。今後多くの症例による検討が必要である。

一方, 胞体内に認められた小型顆粒は正常腺房細胞に認められる分泌顆粒に相当するものと推定され, ACT を考える手がかりになると思われる。しかし本顆粒は, Pap. 染色では染色されず, M.G. 染色のみに認められた。このことは通常の穿刺材料による特殊染色が困難であることを考慮すると, 腺房細胞由来であることの推定に M.G. 染色が有用であることを示すものである。

文 献

- 1) 長尾孝一: 唾液腺腫瘍の分類ならびにまれな腫瘍の解説, 病理と臨床, 7: 560~573, 1989.
- 2) 清見原正騎・他: 穿刺吸引細胞診の術前診断で判明した頬腺由来腺房細胞腫の 1 例, 日臨細胞誌, 25: 726~730, 1986.
- 3) Palma, O., et al.: Fine needle aspiration cytology in two cases of well differentiated acinic cell carcinoma of the parotid gland, Acta Cytologica, 29: 516~521, 1985.
- 4) Koss, L.G.: Diagnostic cytology and its histopathologic bases, pp. 1013~1024, J.B. Lipincott Co., Philadelphia.